



福井とブラジルを繋ぐ「絆のバトン」

谷口 あいこさん 福井県庁
Aiko Taniguchi

福井県庁に勤めてまもなく11年目を迎える谷口あいこさん。

生まれ故郷の福井県と、かつての派遣先ブラジルとの「つなぎ役」として、国際交流の窓口を担っている。

谷口さんは、JICA海外協力隊（JOCV）・日系社会青年海外協力隊として、ブラジル・サンパウロ州にある「コロナ・ピニャール」（通称・福井村）に派遣され、現地の日本語教育に従事した。「福井出身」というだけで、現地の福井出身の方々に大変喜んでいただきました。現地で故郷とブラジルの深い縁を実感するたびに、“福井”への意識が変わっていったという。現在は県庁職員として、ブラジルとの絆を未来へつなぐ大切な役割を果たしている。

谷口さんの現在地

国際交流の根を支える

「パスポートを受け取り喜んで帰られる姿を見ながら、どんな国へ行きどんな経験をするのだろうと想像を膨らませ

ています」

そう語る谷口さんが所属するインバウンド交流課は、2025年4月の組織改変により誕生した。海外からの誘客や研修員の受け入れといった「インバウンド」が主な業務だが、一方で、県民の海外渡航を支える「アウトバウンド」も重要な柱だ。

その一つである旅券業務について、谷口さんは「決まったことを正確にやらなければならない、とても緊張感のある仕事です」と説明する。その姿からは、県庁職員として仕事に向き合う、誠実で真摯な姿勢が伝わってくる。

一方、こうした窓口業務とは別に担当者として取り組んでいるのが、福井県とブラジルの絆を次世代へとつなぐ国際交流事業だ。福井県は多くの移住者をブラジルへ送り出してきた歴史がある。

現地には谷口さんがかつて活動した福井村や県人会といった、福井につながるコミュニティが今も守り継がれている。谷口さんは、2023年の福井村入植60周年、2024年のブラジル福井県人会創立70周年という節目に「福井県慶祝団」の一員として現地へ飛び、調整役として奔走した。

また、1980年から続く海外技術研修



「福井から辞書のプレゼントが届いた」JOCV時代の谷口さんと生徒たち



日本語を教える谷口さんと生徒たち



大阪・関西万博で和太鼓の演奏を披露した「飛翔」のメンバーたち



サンパウロジャパンハウスでの福井フェスのメンバーたち

員の受入事業では、かつての教え子を研修員として迎え入れた。「向こうで教えていた子が、私の地元で頑張っている。その姿を近くで見守れたのは、県庁職員になって本当に良かったと思った瞬間でした」谷口さんが全力で取り組むこうした顔の見える交流事業は、技術習得以上に、両国の若者が自分たちのルーツを知る上で大きな役割を果たしているといえる。

JOCV時代

子どもたちから人生を学ぶ

「いつか海外で働いてみたい」谷口さんにとって、幼い頃から抱き続けてきた海外ボランティアへの夢が形になったのは2010年のことだった。福井県で生まれ育ち、ブラジルの福井村に日本語教師として派遣されたのは、「自分だからこそできる活動を行いたい」という強い思いが結んだ巡り合わせだったのかもしれない。

任務は日本語を教えることだったが、実際は教えること以上に学ぶことの多い日々だったという。「教育は学校の中で

だけで行われるものではなく、子どもたちが生きていることすべてが学び。その視点が重要だと気づかされました」と谷口さんは振り返る。特に大きな影響を与えたのが、日本語学校の生徒らで作る和太鼓グループ「飛翔」の成長だった。赴任当時、地区大会入賞が目下の目標だった彼らは、数年後に全国大会で優勝するまでに実力を高めた。その勇士を側で見守っていた谷口さんは「彼らは私の想像を軽々と超えていったのです」としみじみと話してくれた。

月日は流れ、2024年。大阪・関西万博における万博国際交流プログラムの担当者となった谷口さんは、「今度は私の番だ」と身を引き締めてブラジル・サンパウロへ渡った。現地の福井村や福井県人会の人々と共に「サンパウロジャパンハウス」にて福井の魅力を発信する「福井フェス」を開催。さらに「飛翔」のメンバーを日本へ招くことに尽力し、万博の舞台上で和太鼓を披露する夢を叶えた。「教え子と再び、しかも万博で経験ができるとは。彼らから学んだ情熱を、今度は私なりに還元できた気がします」と谷口さんは感慨深げに語る。

谷口 あいこさん プロフィール

福井県出身。大学在学中に地域の日本語教室で日系人と出会ったことで日系社会に関心を持つ。2010年、JOCV・日系社会青年海外協力隊としてブラジル「福井村」の日本語学校へ赴任。帰国後、福井村の子どもたちの成長をテーマに修士号を取得。2016年、福井県庁入庁。

未来へのビジョン

心をつなぐ交流を

谷口さんにとってJOCVとしての2年間の活動は、任期を終えてもなお、福井とブラジルの歴史をつなぐ確かな一助となっている。「今後、福井とブラジルの交流の機会がいろいろな人に広がっていつてくれることを願っています」そう語る谷口さんが大切にしているのは、単なる事業の継続ではなく「お互いの顔が見える関係を続けていくこと」だという。ブラジルの若者が自らのルーツに誇りを持ち、福井の若者が彼らを通じて世界へ目を向ける。行政の枠組みを超え、心の通うきっかけの一つひとつ丁寧につっていく——。それが、谷口さんなりの国際交流のあるべき姿なのだ。

谷口さんへのエール!

福井県交流文化部
インバウンド交流課
国際室 室長
居関 吉記さん



ブラジルと福井を繋ぐ架け橋

谷口さんと一緒にブラジル福井村の若者たちを万博と福井に迎えることができました。業務中の真剣なまなざしはいつもながら頼もしく、ふとした瞬間に見せる、かつての教え子に向けたやさしい表情がとても印象的でした。谷口さんのバイタリティには、私たちも大いに刺激を受けています。これからも、温かさやエネルギーで、福井とブラジルの交流をより一層にぎやかにしていただきます。活気ある県庁に、サンバのリズムをプラスする勢いで!心から応援しています。